予防・開発的教育相談の考えを生かした支援のあり方

―　学級づくりと授業づくりを中心にして　―

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　いの町教育研究所　研究主事　田所　三佳

**１　はじめに**

近年、児童を取り巻く家庭、地域、社会などの環境の変化が著しい中で、問題行動が多様化し、深刻な事例も急増してきた。また、本来集団の中では、気づき・洞察・試行錯誤・模倣などの学びの機会があるが、現在では集団が持っている教育的機能が失われている面がある。そのため、これまでの治療的な学校教育相談活動に加え、問題の早期発見をはじめ、問題を生み出さないための個や集団への予防・開発的教育相談が必要となってきている。しかも、その役割は児童生徒に日々直接かかわる学校の教師が日常的に担うものであり、今の子どもたちの問題の現状を理解し、現状に即した教育相談的なかかわりを日々の学級づくりや授業づくりの中で実践していくことが求められている。

その際、教師が行う児童生徒への援助サービスのレベルについて、石隈(1999)は、すべての子どものいっそう望ましい発達を支援する開発的・予防的な一次的援助サービス、子どもの発達を妨害することを予防するための二次的援助サービス、問題状況を抱える特定の子どもに対する三次的援助サービスの三段階に分けている。中でも、学級づくりと授業づくりにおいては、学級のすべての児童生徒を対象とする一次的援助サービスが、個や集団の状態に応じて様々な方法を用いながら学校生活の中で展開されることで、児童生徒のより望ましい成長を支えることができると考える。また、二次的・三次的援助サービスについても、少人数や個別での指導を課題にそって展開していくことで、児童生徒の望ましい成長を促すことができると考える。  
　そこで本研究では、「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U（以下、Q-U）」などで児童の実態を調査した結果を基に、個や集団が必要とする発達促進的な支援、問題の予防や早期発見、問題解決への継続的な支援など、学級づくりにおける具体的な支援のあり方について考えていきたい。また、予防・開発的教育相談の考えを生かし、個や集団の状態に合った授業づくりについても考えていきたい。児童生徒の現状に合った、学級づくりや授業づくりを継続的・計画的に進めることで、児童生徒が、あたたかい居場所があり、学ぶ喜びを感じることができる安心した環境の中で、生きる力をはぐくむことができると考える。

**２　研究の目的**

児童生徒の実態に合った、予防・開発的教育相談の視点を生かした個と集団への効果的な支援のあり方を探る。

**３　実践研究の流れ**

⑴　Q-U分析を生かした学級づくり・授業づくりを進めるための校内Q-U分析検討会

⑵　仲間づくりをねらいとした学級づくりプログラム

⑶　教育支援センターでの実践

⑷　中学校区の小小連携の提案

**４　実践研究の内容**

⑴　Q-U分析を生かした学級づくり・授業づくりを進めるための校内Q-U分析検討会

　町内Ａ小学校の分析検討会に参加し、Q-Uの分析の仕方と分析後の支援について助言を行った。

　　ア　１回目のQ-U実施後、以下のような内容で分析検討会を行い、個人や学年で今後の具体的な支援方法を検討したり、課題に対する具体的な活動の紹介を行ったりした。

**学級経営の実践に生かすQ-Uの分析**（Q-U分析検討会での配付資料より抜粋）

**本日の内容**

　　　　　１　Q-Uの分析結果や日ごろの観察をもとに、学級の現在の状態を見立てる。

　　　　　　・いごこち、やる気のデータから、ポジティブ・ネガティブチェック

　　　　　　・行動観察とデータのずれを確認

　　　　　２　具体的な支援法を検討する（学級全体＆個別、学年全体で）。

３　アイデアのひとつとして、支援方法や活動紹介

１　学級の現在の状態を分析してみましょう。

⑴　「学級満足度尺度」（いごこちアンケート）、「学校生活意欲尺度」（やる気アンケート）のデータから、ポジティブチェック（肯定的回答）とネガティブチェック（否定的回答）を色分けして塗ってみましょう。

　　　　　（いごこちアンケート）

　　　　　　・１～６については、４がポジティブ、１がネガティブ

　　　　　　・７～１２については、１がポジティブ、４がネガティブになります。

　　　　　（やる気アンケート）　・４がポジティブ、１がネガティブになります。

○　色分けして気づいたことを書きましょう。

⑵　日ごろの行動観察とデータにずれがあると感じる子はいませんか。

２　具体的な支援方法を考えてみましょう。

○　ポジティブチェックは学級の強み。強みは伸ばし、弱みに対する対応を考えてみましょう。

　　　　○　「学級全体には、まず○○をやろう」「Ｂさんには、○○の支援をしよう」

○　今とはちがう視点で見ていくことも考えてみましょう。

３　アイデアのひとつとして、分析をもとにした支援方法や活動の紹介

⑴　支援方法

・全員とお話タイム…短時間で、全員と、１対１で、何事もなくても

・座席表にチェック…意識して指名や机間指導

　　　 　 ・授業の中で…ペアでの活動、相手を変えて活動、いいところを見つけ伝え合う

⑵　活動紹介

　　○「ちがいはどーれ」「しつもんジャンケン」…相手の話を聞く練習

○「めざせ！マナー名人」…必要な場面で必要な言葉を相手に言う

　　　　　○（低）「まきもどして、ドンマイ！」…友達が一生懸命やって失敗したときは許す

（中）「短気は損気、応援はやる気」…友達が一生懸命やって失敗したときは許す

（高）「ほめ方十人十色」…友達に元気がないときは励ます

・一生懸命やっているからこそ失敗する。失敗したらすぐに謝ることも合わせて指導する。「責める」より、やさしい声がけや冷静になってとる行為の方が自分にとっても相手にとってもプラスになることに気づかせる。

イ　２回目のQ-U実施後の分析検討会に参加した。

**２回目の**Q-U**の分析とこれからの支援**（Q-U分析検討会の内容より抜粋）

１　各担任より１回目からの変化と現在の様子や取組についての報告

２　２回目のQ-Uの分析とこれからの支援について

　　　　⑴　報告から生かせること

　　　　　・各学級から、よくなったこと、うまくいっていることがたくさん出てきた。そのやり方をぜひ先生方で共有してほしい。受け持っている子どもたちは違っても、共通した課題がある。その中からぴったり合う支援が見つかるのではないか。それを先生方全員の共通のものとしていきたい。

　　　　⑵　何事もないときの働きかけ

　　　　　・あたりまえのことができている子に対して、認める声がけをする。

　　　　　　・何も起きていないから何もないのではない。私たちもいろいろなことを感じたり抱えたりしているが、それを常に言葉や行動に出しているわけではない。でも少し声をかけてもらったり聞いてもらったりすることで、とらえ方が変わって楽になったり安心したりすることがある。子どもたちも同じではないか。

　　　　　・顔を見て声をかける、話を聞く、日記に書いてきたことに答えるなどのかかわりの積み重ねが、その子の意欲や学級全体の雰囲気につながっていく。

　　　　⑶　とらえ方が支援の方向性を決める

　　　　　・児童に問題行動があるとき、その行動をどうとらえるか、そのとらえ方によって支援の方向性が決まってくる。

　　　　　・私たちがたくさんのとらえ方を持つことで、支援の方法も広がってくる。

　　　　⑷　相談できる「だれか」を持つ

　　　　　・自分一人ではなくチームで支援を考える。

　　　　　・一人ではとらえ方も限られている。そんなとき隣の席の先生、学年の先生、専科の先生、管理職の先生などに「どう思いますか？」と聞いてみよう。違うとらえ方ができれば支援の方法も広がり、その中で気づくことやぴったりなことを見つけられるかもしれない。

ウ　考察

　　　　１回目・２回目のQ-U後の分析検討会をもつことによって、取組による変化や学級や児童の成長、課題がよくわかった。また、年間を通してQ-Uの分析を生かしながら学級づくりや授業づくりを進めていく上で、必要な支援を考えることができた。支援のポイントは、以下の２点である。

　 (ｱ)　一人一人へのタイムリーで地道な声がけや対話、成長を認め喜び合う関係づくり

　　 (ｲ)　担任だけでなくチームで指導・支援していくための、とらえ方や支援方法の共有

　　　　　分析検討会では、各クラスの実態や取組を全体で交流することが多いが、その中で出された課題や効果的な支援方法を共有する場を設定することによって、実態報告で終わらず、次の日からの全校的な取組につながると考える。全体での実態報告後に、学級学年を絞ってKJ法を活用した分析検討会を行うことで、とらえ方や効果的な支援の方法が多数提案された。

⑵　仲間づくりをねらいとした学級づくりプログラム　　　　　　　　　　　　　　　　　　　年間を通して、プロジェクトアドベンチャー、構成的グループエンカウンター、ソーシ

ャルスキルトレーニングの手法を用いて、仲間づくりを進めることをねらいとした学期ごと、月ごとの学級づくりプログラムを作成した。主に、学級活動や朝・帰りの会の時間等に継続的に取り組んでいくことを考えてみた。また、Q-Uの分析からの課題に対応する活動例も考えた。

ア　学級の課題に対応するプログラム例

　　 (ｱ)　いごこちアンケート質問項目７・８にネガティブチェックが多いとき

　　　　　→「めざせ！マナー名人」「まきもどしてドンマイ！」「短気は損気、応援はやる気」

「ほめ方十人十色」

　　 (ｲ)　いごこちアンケート質問項目１・２にネガティブチェックが多いとき

→「いいとこ四面鏡」「あなたの○○が好きです」「はげまし方十人十色」

　　イ　短時間でできる心ほぐしの活動

　　 (ｱ)　合わせてポン…できるだけたくさんの友達と出会いを楽しむ

(ｲ)　ちがうのどーれ？…聞きながら楽しめる

　　 (ｳ)　ビート…ふれあいながらみんなでチャレンジ

　　 (ｴ)　チェンジ３…相手の変化をよく見て気づく

　　 (ｵ)　チェンジアップ…楽しくグループ作りをし、いろいろな仲間と出会う

　　　　活動例「チェンジアップ」の活動内容

①人数分のトランプカードを４種類のマークで均等に枚数を分けて準備する（20人なら１から５までを４種類）。

　　　　②裏向けにしたままでカードを見たり見せたりせずに一人ずつに配る。

　　　　③配られたカードを見せないように気をつけて３人の友達と交換する。

　　　　④「カードオープン！」の声がけで自分のトランプカードを見て、同じマークの人を探して集まり、１から順に１列に並ぶ。グループでそろったら「イェーィ！」など決めておいた合い言葉をグループ全員で大きな声で言う。

表１　仲間づくりをねらいとした学級づくりプログラム年間計画（５年生）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 段階 | 月 | 活動のねらい | 活動内容例 |
| １学期【居場所づくり・仲間意識】 | ４ | ・よりよい学級をつくろうとする意欲を持つ。  ・友達と活動することを通して、リラックスした楽しさの中でお互いに親しみを持つ。 | ・ビート　・合わせてポン  ・しつもんジャンケン  ・うれしい話の聞き方 |
| ５ | ・友達とかかわりながら活動する楽しさや友達のよさを知る。  ・ルールを守り、お互いが安心できる環境をつくる。 | ・サイコロトーキング  ・ふわふわ言葉とチクチク言葉  ・二者択一  ・どこでもペア |
| ６ | ・身体活動を通して、相手に合わせることや合  わせてもらうことを体験する。 | ・ウエーブ  ・エブリボディアップ  ・パイプライン　・大縄くぐり |
| ７ | ・友達と意見を出し合ったり聞き合ったりしな  がら、課題を解決する活動を体験する。 | ・われら○○族  ・宝さがし  ・新聞紙の使い道 |
| ２学期【相互理解・協力】  【相互理解・協力】 | ９ | ・学級目標を見直し、目標を設定する。  ・身体活動を通して、自然に協力できるような関係づくりを進める。 | ・ミラーストレッチ  ・東西南北  ・風船運び　・人間知恵の輪 |
| 10 | ・友達と意見を出し合ったり聞き合ったりしな  がら課題を解決する。  ・友達のよさを見つける。 | ・フープ知恵の輪  ・ジョハリの窓  ・いいとこ四面鏡 |
| 11 | ・友達と意見を出し合ったり聞き合ったりしな  がら課題を解決する。  ・友達のよさを見つける。 | ・ほめ方十人十色  ・魔法のじゅうたん  ・ジャグリング |
| 12 | ・お互いのよさを生かしながら協力して活動す  る。 | ・共同絵画  ・リフレーミング |
| ３学期【認め合い・信頼】 | １ | ・学級目標を見直し、目標を設定する。  ・コミュニケーションをとりながら、協力して課題を解決する。 | ・フープ・ザ・グループ  ・協力パズル  ・聖徳太子ゲーム |
| ２ | ・相手を大切にする、相手を信頼するということを、体験を通して感じる。 | ・言いたい＆言ってほしい  ・ホグコール  ・納豆リバー |
| ３ | ・協力し合い、お互いを信頼しながら課題を解決する。  ・お互いのよさを認め合う。 | ・風船列車  ・ヒューマンチェアー  ・別れの花束 |

⑶　教育支援センターでの実践

教育支援センターに通室する不登校児童生徒に対し、集団活動を通して個に応じた成長・発達を促す活動プログラムを継続的に実施した。

表２　平成24年度　教育支援センター　２・３学期　チャレンジタイム実施計画

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 月 | ね　ら　い | 主　な　活　動　内　容 |
| ９ | ・将来への自己イメージを持つ。  ・友達の話を聞いたり、自分のことを話したりすることで自己理解、他者理解を深める。 | ・10年後の私  ・ポーズタグ  ・すごろくトーキング  ・二者択一  ・共通点を探せ |
| 10 | ・活動を通して友達のよいところを見つける。  ・協力して課題を達成する楽しさを知る。 | ・ジョハリの窓  ・ミラーストレッチ  ・ポーズじゃんけん  ・私を見つめて  ・人間知恵の輪 |
| 11 | ・相手の動きに合わせたり、話し合いをしたりしながら、協力して課題を解決する。  ・活動を通して他者理解を深める。 | ・あいこじゃんけん  ・サークルウエーブ  ・魔法のじゅうたん  ・ハブユーエバー  ・ほめ方十人十色  ・フープ・ザ・グループ |
| 12 | ・協力して課題を解決する喜びを体験する。 | ・ビート  ・伝染ポーズ  ・風船列車  ・聖徳太子ゲーム  ・納豆リバー |
| １ | ・自分の思いを発信する。 | ・リアクションドッキリチェック  ・してもらいたいこと十人十色  ・言いたい＆言ってほしい |
| ２ | ・自分の感じ方や、友達の感じ方との違いを知り、認め合う。 | ・リフレーミング  ・いいとこ四面鏡  ・共同絵画 |
| ３ | ・自分の新たな一面に気づき自己肯定感を高める。 | ・別れの花束  ・感謝の気持ちを表そう |

ア　教育支援センター「チャレンジタイム実践プログラム」（活動記録）

１　活動のねらい

・協力して課題を解決し、達成感を持たせる。

・楽しみながら、他人や自分について気づく。

（児童生徒のめあて「友達を知ろう、自分を知ろう」）

２　活動内容

⑴　「ポーズタグ」（５分）

　　　　　・頭・おなか・おしり星人にわかれて、タッチしたらその星人になっていく。

　　　　　・安全のため、スピードを制限して行う。

⑵　「人間知恵の輪」（10分）

　　 　・円になり隣の人以外の二人の人と手をつなぐ。円になるように意見を出し合いながら腕のもつれをほどいていく。

⑶ 「ジョハリの窓」（25分）

　　 ・グループの中の一人について、他のメンバーがジョハリの窓シートの項目で、その人のイメージに合う項目を指さす。

　　 ・言われた人は、「本当の私は…」と言って自分の考えている項目を指さす。

　　　　　・一人ずつ順番に替わり合って言っていく。

⑷　ふり返り（５分）

　　　　　・ふり返りカードに記入する。

３　準備物

　　　　　ジョハリの窓シート　　ふり返りカード

　　イ　考察

　回数を重ねるごとに、お互いのことを知り合ったり協力して課題を達成したりする活動を、全員で楽しみながら体験することができた。ふり返りカードを見ると、活動の中で友達と自分の似ているところを発見したり友達のよいところを見つけたりすることで、安心感や一体感を持つことにつながったようである。また、活動前は恥ずかしさや緊張感を持っていた児童生徒も、活動終了後には「恥ずかしかったけれど楽しかった」「難しいと思ったけどがんばってできた」「みんなで一つのことをやり遂げるとスッキリする」と達成感を持つことができたようである。活動を通して体験したことを、日常生活での自信やチャレンジする気持ちへとつなげることが今後の課題である。

⑷　中学校区の小小連携の提案

中学校区で小小連携を実施しているＣ市の事業を研究視察した。このプロジェクトは、小学６年生が集まって仲間づくりの活動を共に体験することで、中学校入学に対しての不安を解消すること、中学校区の小小連携や小中連携を深めることを目的としている。

筆者が勤務する市町村でも、中学校区での小中連携、小小連携を推進しており、中一ギャップの未然防止の取組として中学校入学前に小小連携の活動を取り入れることも効果的であると考え、実施活動案の検討を行った。

　表３　中学校区小小連携　中一ギャップ未然防止取組活動案

|  |  |
| --- | --- |
| １　時期　　中学校一日入学の午前  ２　日程　　・11:00～12:30  出会いの活動（小小連携）  　　　　　　・13:30～15:30  　 一日入学（小中連携）  ３　場所　　中学校体育館 | ４　出会いの活動　・ひたすらじゃんけん  　　　　　　　　　・ラインアップ  　　　　　　　　　・自己紹介  ・ビート  ・出会いのビンゴ  ・パイプライン  　　　　　　　　　・ふり返り |

**５　成果と課題　（◎成果・○課題）**

◎　Q-Uの分析を生かした学級づくり・授業づくりを進めるためには、１回目・２回目ともにQ-U実施後に分析検討会を持ち、効果的な支援を学校全体で共有し、学級担任だけでなく学校全体として取り組む体制をつくることが有効であることがわかった。

　◎　年間を通して一次的援助サービスとして学級づくりの活動に取り組んでいくためのプログラムと、二次的援助サービスとしてQ-U分析や実態からつかんだ課題に対する活動という両面からのアプローチを検討し、実践に生かせる成果をまとめることができた。

◎　教育支援センターで、集団活動を通して個に応じた成長・発達を促すことにつながる活動実践をしたことで、一人一人が自分のがんばりや友達のよさに気づき、自己理解や他者理解を進めることができた。課題に合った活動プログラムに継続して取り組むことで、個の成長に有効であった。

　○　Ｃ市の取組は中学校入学前の児童全員への予防・開発的な一次的援助サービスであり、今後、筆者が勤務する市町村でも同様の目的を持って取り組めるよう研究を進めたい。

　○　学級づくりに関しては具体的なプログラム等の検討ができたが、授業づくりについては学級の状態に応じた具体的な授業構成や学習方法について示すことができなかった。来年度からは、一次的援助サービスである授業の中で、子どもたちのよさを見つけ授業構成に生かしていくことと、学級の課題に応じた具体的な授業づくりについて研究していきたい。

　○今後も、子どものとらえ方や具体的な支援方法について研究や実践を続け、子どもの望ましい成長や発達を支援し続けていきたい。

〈参考・引用資料〉

１．河村茂雄・品田笑子・藤村一夫(2007)「いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル低・中・高学年」　図書文化

２．河村茂雄・品田笑子・藤村一夫(2004)「構成的グループエンカウンター事典」図書文化

３．河村茂雄(2010)「授業づくりのゼロ段階〔Q-U式授業づくり入門〕」図書文化

４．河村茂雄(2012)「学級集団づくりのゼロ段階〔Q-U式学級集団づくり入門〕」図書文化

５．諸富祥彦;大竹直子(2005)「自己表現ワークシート」図書文化

６．大竹直子(2008)「自己表現ワークシート２」図書文化

７．栗原慎二(2002)「新しい教育相談の在り方と進め方」ほんの森出版

８．石隈利紀(1999)「学校心理学　教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス」誠信書房